

# 降誕祭聖体礼儀代式 单音聖歌譜



釧路ハリストス正教会

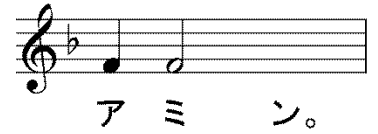
注意 譜面中、五線譜上に ||o|| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈祷文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

2021年 1月 7日

釧路ハリストス正教会

管轄司祭ステファン内田圭一

代禱) <sup>しゅ</sup>主 <sup>かみ</sup>イイスス・<sup>こ</sup>ハリストス、<sup>なんぢ</sup>神の子よ、<sup>しじょう</sup>爾 <sup>はは</sup>が至 <sup>しよせいじん</sup>淨の母と諸 <sup>きとう</sup>聖人との祈禱に <sup>より</sup>因て、我等  
<sup>あわれ</sup>を <sup>たま</sup>憐み給え、



【 大聯禱 】

代禱) <sup>われらあんわ</sup>我等安和にして <sup>しゅ</sup>主に <sup>いの</sup>禱らん、



代禱) <sup>うえ</sup>上より <sup>くだ</sup>降る <sup>あんわ</sup>安和と <sup>われら</sup>我等が <sup>たましい</sup>靈 <sup>すくい</sup>の救 <sup>ため</sup>の爲に <sup>しゅ</sup>主に <sup>いの</sup>禱らん、



代禱) <sup>ぜんせかい</sup>全世界の <sup>あんわ</sup>安和、<sup>かみ</sup>神の <sup>せい</sup>聖なる <sup>しよきょうかい</sup>諸教會の <sup>けんりつ</sup>堅立、<sup>およ</sup>及び <sup>しゅうじん</sup>衆人の <sup>ごういつ</sup>合一の爲に <sup>しゅ</sup>主に <sup>いの</sup>禱らん、



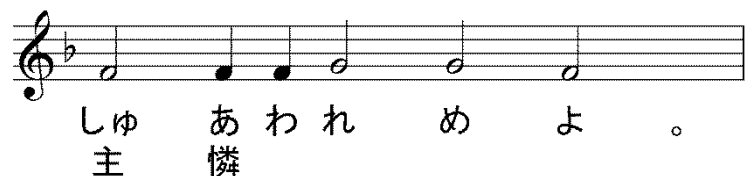
代禱) <sup>こ</sup>此の <sup>せいどう</sup>聖堂、<sup>およ</sup>及び <sup>しん</sup>信と <sup>つつしみ</sup>慎と <sup>かみ</sup>神を <sup>おそ</sup>畏る <sup>こころ</sup>心とを <sup>もつ</sup>以て <sup>こ</sup>此に <sup>きた</sup>來る <sup>もの</sup>者の爲に <sup>しゅ</sup>主に <sup>いの</sup>禱らん、



代禱) <sup>きょうかい</sup>教會を <sup>つかさど</sup>司る <sup>そんき</sup>尊貴なる <sup>われら</sup>我等の <sup>ぜんにつぼん</sup>全日本の <sup>ふしゅきょう</sup>府主教 <sup>だにいろ</sup>ダニイル、<sup>そんき</sup>尊貴なる <sup>われら</sup>我等の <sup>せんだい</sup>仙台の

<sup>だいしゅきょう</sup>大主教 <sup>せらふいむ</sup>セラフィム、<sup>しさい</sup>司祭の <sup>そんぴん</sup>尊品、<sup>よ</sup>ハリストスに <sup>ほさいしよく</sup>因る <sup>ことごと</sup>輔祭職、<sup>きょうしゅう</sup>悉くの <sup>およ</sup>教衆、及び

<sup>しゅうじん</sup>衆人の爲に <sup>しゅ</sup>主に <sup>いの</sup>禱らん、



わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの  
代禱) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの  
代禱) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの  
代禱) 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ  
代禱) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び  
かれら すくい ため しゅ いの  
彼等の救の爲に主に禱らん、



われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの  
代禱) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るるが爲に主に禱らん、



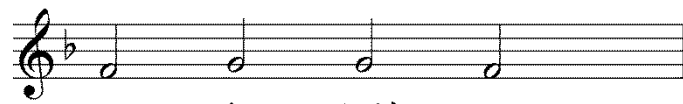
かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも  
代禱) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
代禱) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

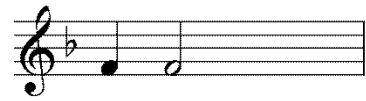
いのち もつ かみ いたく  
生命を以て、ハリストス神に委託せん、



しゅ な ん ぢ に 。  
主 爾

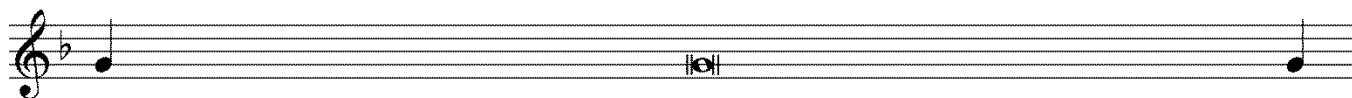
代禱) <sup>しゅ</sup>主 <sup>かみ</sup>イイスス・<sup>こ</sup>ハリストス、<sup>なんぢ</sup>神の子よ、<sup>しじょう</sup>爾 <sup>はは</sup>が<sup>しよせいじん</sup>至 淨 <sup>きとう</sup>の母と諸 聖 <sup>より</sup>人との祈禱に<sup>われら</sup>因て、我等

<sup>あわれ</sup>を <sup>たま</sup>憐み給え、



ア ミ ン。

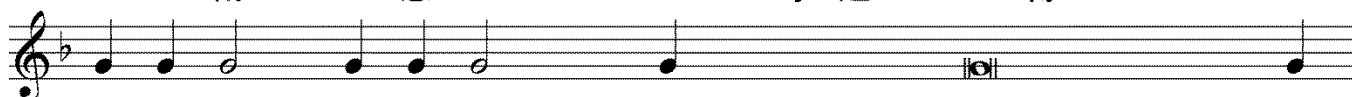
【 第一アンティフォン 】



しゅよ、われこころをまっとうしてなんぢをさんえい  
主 我 心 全 爾 讚 榮



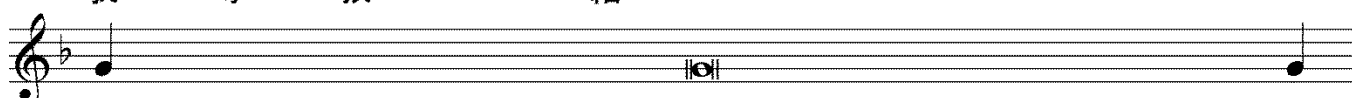
し、なんぢがことごとくのきせきをつたえん。  
爾 悉 奇 迹 傳



きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって  
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因



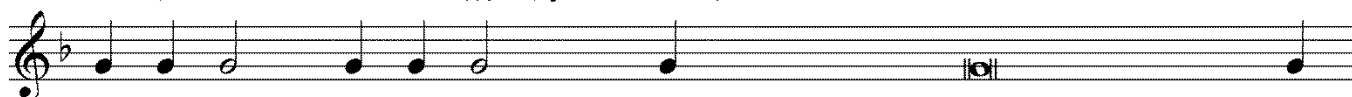
われらをすくいたまえ。  
我 等 救 給 え。



ぎしゃのしゅうぎのうち、およびそのかいのうち  
義 者 集 議 中 及 其 会



においてしゅのしわざはおおいなり。  
於 主 所 爲 大



きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって  
救 世 主 生 神 女 祈 禱 因



われらをすくいたまえ。  
我 等 救 給 え。

およそこれをあいするもののためにしとう  
凡之愛者爲慕

べし。

きゆうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって  
救世主 生神女 祈禱 因

われらをすくいたまえ。  
我等救給

そのしわざはこうえいなり、びれいなり、そ  
其所爲 光榮 美麗

のぎはながくそんす。  
義永存

きゆうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって  
救世主 生神女 祈禱 因

われらをすくいたまえ。  
我等救給

こうえいはちちとこせいしんにきす、いまも  
光榮 父子 聖神 歸 今

いつもよよに、アミン。  
何時 世世

きゆうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって  
救世主 生神女 祈禱 因

われらをすくいたまえ。  
我等救給

【 小聯禱 】

われらまたまたあんわ しゅ いの  
代禱) 我等復又安和にして主に禱らん、



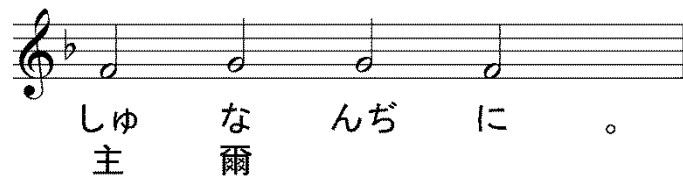
かみ なんぢ おんちやう もつ われら たす すく あわれ まも  
代禱) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、



しせいしけつ いたさんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ  
代禱) 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら  
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのち もつ かみ いたく  
生命を以て、ハリストス神に委託せん、

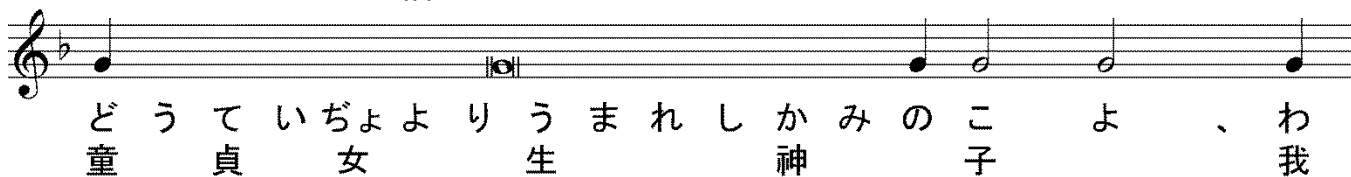
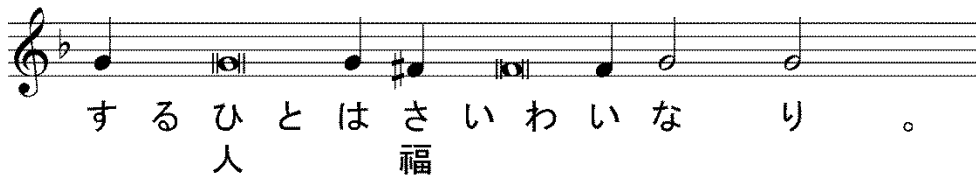
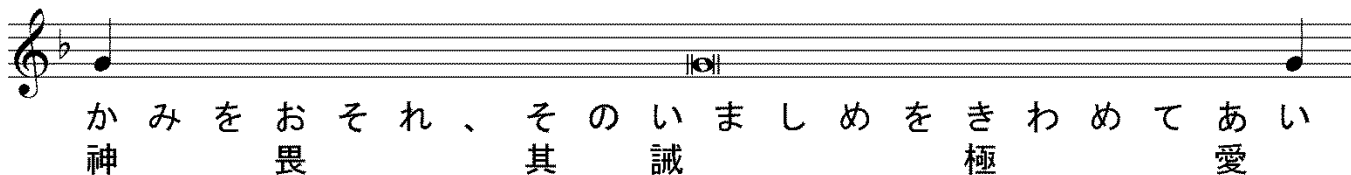


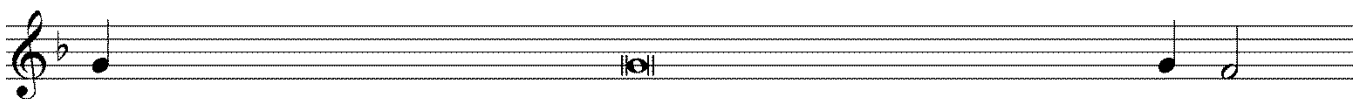
しゅ かみ こ なんぢ しじやう はは しよせいじん きとう より われら  
代禱) 主イイスス・ハリストス、神の子よ、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に因て、我等

あわれ たま  
を憐み給え、



【 第二アンティフォン 】

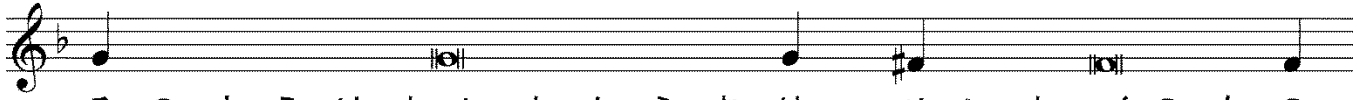




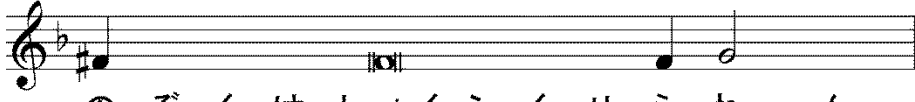
れらなんぢにアリライヤをうたうものをすく  
等爾 歌 者 救



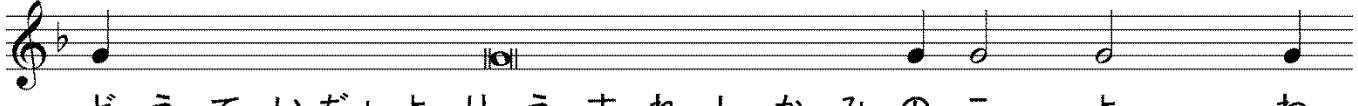
いたまえ  
給



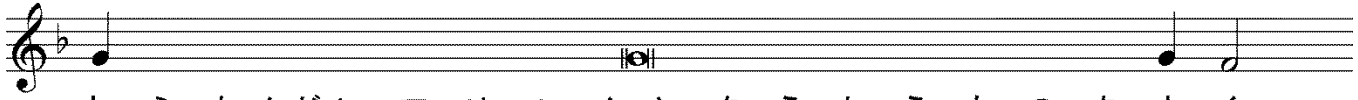
そのすえはちにちからあり、せいちよくのもの  
其 裔 地 力 正 直 者



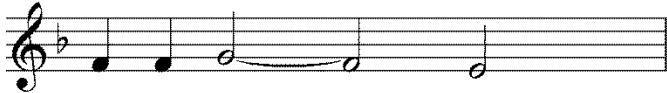
のぞくはしゆくふくせられん。  
族 祝 福



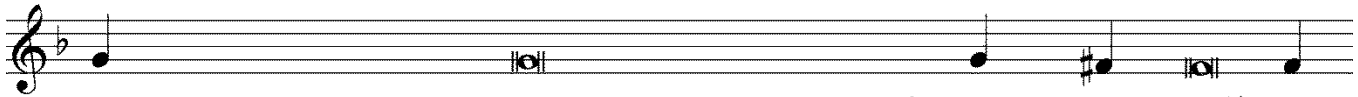
どうていぢよよりうまれしかみのこよ、わ  
童 貞 女 生 神 子 我



れらなんぢにアリライヤをうたうものをすく  
等爾 歌 者 救



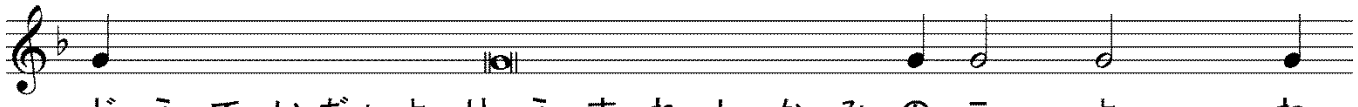
いたまえ  
給



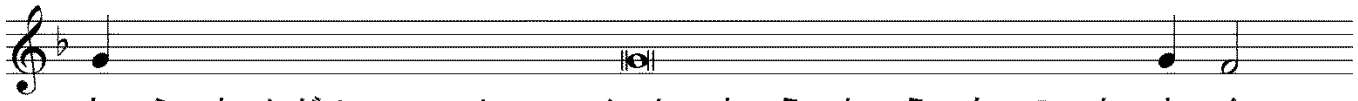
とみとたからとはそのいえにあり、そのぎは  
富 財 其 家 其 義



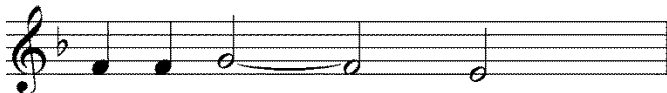
ながくそんす。  
永 存



どうていぢよよりうまれしかみのこよ、わ  
童 貞 女 生 神 子 我



れらなんぢにアリライヤをうたうものをすく  
等爾 歌 者 救



いたまえ  
給



せいちよくのもののためにひかりはくらやみの  
 正直者 爲 光 闇 冥  
 うちにいづ、かれはいつくしみありめぐみあ  
 中 出 彼 慈 恵  
 りてぎなるものなり。  
 義 者  
 どうていぢょよりうまれしかみのこよ、わ  
 童 貞 女 生 神 子 我  
 れらなんぢにアイルイヤをうたうものをすく  
 等 爾 歌 者 救  
 いたま え  
 給

【 神の獨生の子 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 いつもよよに、アミン。  
 何時 世 世  
 かみのどくせいのこならびにことばよ、  
 神 獨 生 子 並 言  
 しせざるものにしてわれらをすくわんがため  
 死 者 我 等 救 爲  
 あまんじてせいなるしょうしんぢょ・えいていどうぢょ  
 甘 聖 生 神 女 永 貞 童 女

マ リ ヤ よ り み を と り 、 か み の せ い を か え  
 身 取 神 性 易  
 ず し て ひ と と な り じ ゅ う じ か に く ぎ う た れ 、  
 人 十 字 架 釘  
 し を も っ て し を ふ み や ぶ り し ハ リ ス ト ス か み よ 、  
 死 以 死 踏 破 神  
 せ い さ ん し ゃ の い つ と し て ち ち と せ い し ん と と  
 聖 三 者 一 父 聖 神 共  
 も に さ ん え い せ ら る る の し ゅ よ 、 わ れ ら を す 救  
 讚 榮 主 我 等  
 く い た ま え 。  
 給

【 小 聯 禱 】

代禱) <sup>われらまたまたあんわ</sup>我等復又安和にして<sup>しゅ いの</sup>主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 、 しゅ あ わ れ め よ 。  
 主 憐 主 憐

代禱) <sup>かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも</sup>神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

<sup>しせいしけつ いた さんび われら こうえい ちよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ</sup>  
 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

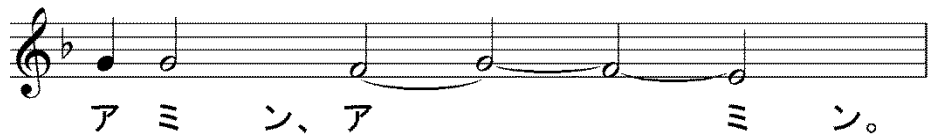
<sup>しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら</sup>  
 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

<sup>いのち もつ かみ いたく</sup>  
 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅ な ん ぢ に 、  
 主 爾

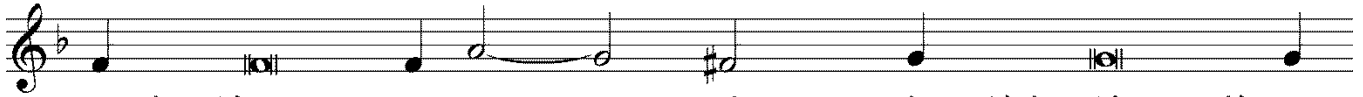
代禱) <sup>しゅ かみ こ なんぢ しじょう はは しよせいじん きとう より われら</sup>  
 主イイスス・ハリストス、神の子よ、爾が至淨の母と諸聖人との祈禱に因て、我等

<sup>あわれ たま</sup>  
 を憐み給え、

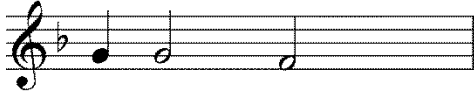


ア ミ ン、ア ミ ン。

【 第三アンティフォン 】



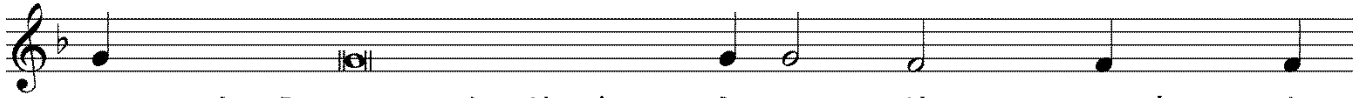
しゅわ が しゅに い え り 、 なんぢわ が みぎに  
主 我 主 謂 爾 我 右



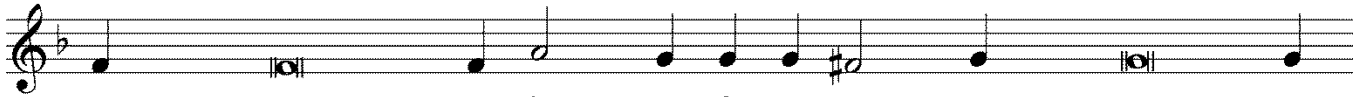
ざ せ よ 。  
坐



ハリストスわ が か み よ 、 なんぢの こうたんは せ か  
我 神 爾 降 誕 世 界



いに ち え の ひかりを てら せ り 、 これに よ  
智 慧 光 照 此 由



りて ほしに つとむ る もの は ほしに おし え  
星 勤 者 星 教



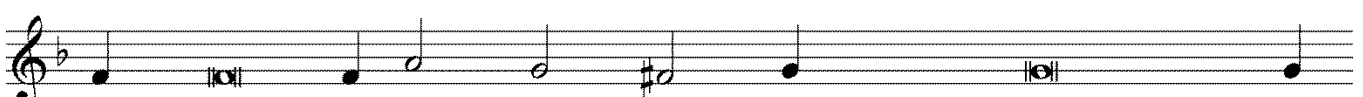
ら れて 、 なんぢぎ の ひを おが み 、  
爾 義 日 拜



なんぢう えよりの ひがしを さとれ り 。  
爾 上 東 覚



しゅよ 、 こう え い は なんぢに き す 。  
主 光 榮 爾 歸



わ が なんぢの て き を なんぢの あし の だい と  
我 爾 敵 爾 足 台



な す に い た れ 。  
爲 迄

ハリストスわが か み よ 、 なんぢの こうたんは せ か  
 我 神 爾 降 誕 世 界  
 い に ち え の ひ か り を て ら せ り 、 こ れ に よ  
 智 慧 光 照 此 由  
 り て ほ し に つ と む る も の は ほ し に お し え  
 星 勤 者 星 教  
 ら れ て 、 なんぢぎ の ひ を お が み 、  
 爾 義 日 拝  
 なんぢう え よ り の ひ が し を さ と れ り 。  
 爾 上 東 覚  
 しゅよ 、 こう え い は なんぢに き す 。  
 主 光 榮 爾 歸  
 しゅは シ オンより なんぢが の う りよくの つ え を つ か  
 主 爾 能 力 杖 遣  
 わ さ ん、なんぢは そ の て き の う ち に しゅたる  
 爾 其 敵 中 主  
 べ し 。  
 ハリストスわが か み よ 、 なんぢの こうたんは せ か  
 我 神 爾 降 誕 世 界  
 い に ち え の ひ か り を て ら せ り 、 こ れ に よ  
 智 慧 光 照 此 由

りてほしにつとむるものはほしにおしえ  
 星 勤 者 星 教

られて、なんぢぎのひをおがみ、  
 爾 義 日 拝

なんぢうえよりのひがしをさとれり。  
 爾 上 東 覚

しゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
 主 光 榮 爾 歸

なんぢがのうりよくのひにおいて、なんぢの  
 爾 能 力 日 於 爾

たみはせいなるびれいをもってそなえられた  
 民 聖 美 麗 以 備

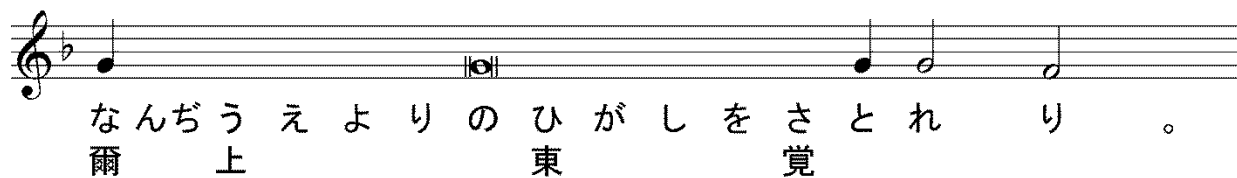
り。

ハリストスわがかみよ、なんぢのこうたんはせか  
 我 神 爾 降 誕 世 界

いにちえのひかりをてらせり、これによ  
 智 慧 光 照 此 由

りてほしにつとむるものはほしにおしえ  
 星 勤 者 星 教

られて、なんぢぎのひをおがみ、  
 爾 義 日 拝



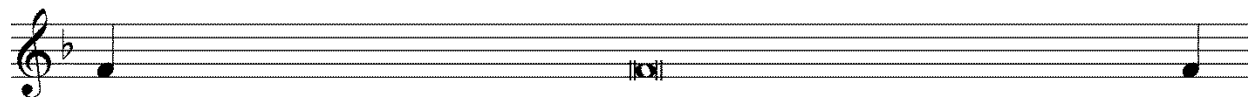
なんぢう えよりの ひがしを さとれ り。  
爾 上 東 覚



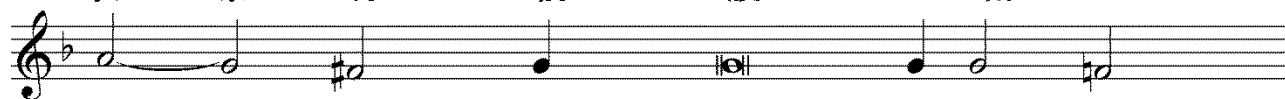
しゅよ、こう えいは なんぢに きす。  
主 光 榮 爾 歸

代禱) <sup>えいち</sup>睿智、<sup>つつし</sup>肅 <sup>た</sup>みて立て、

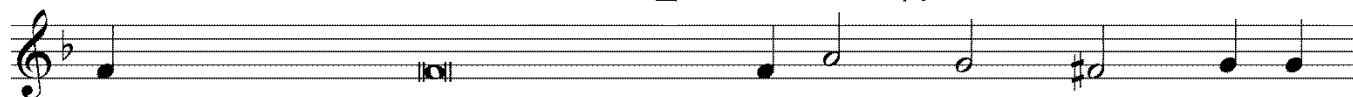
【 聖入の句 】



われしの のめの まえには らより なんぢを う  
我 黎 明 前 腹 爾 生



め り、しゅ はちかいて くい ず。  
主 誓 悔

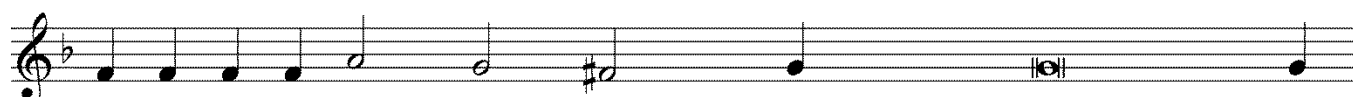


なんぢメルキセデクのはんにしたが い て し さ  
爾 班 循 司 祭

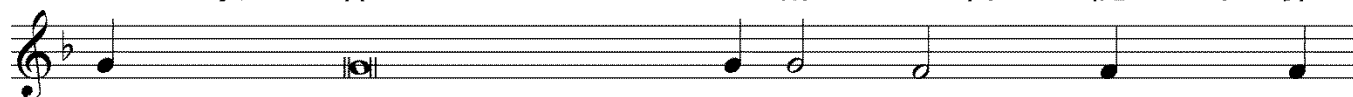


いとなりてよよ にいたらん。  
爲 世 世 迄

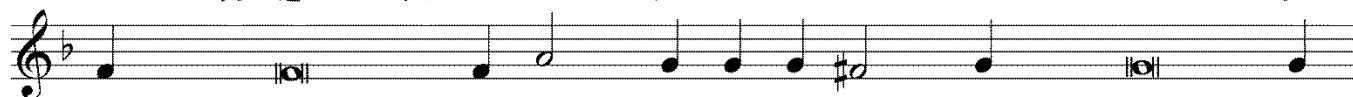
【 降誕祭のアポリティキオン 】



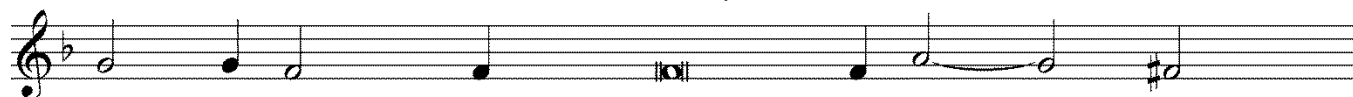
ハリストスわが か み よ、なんぢの こうたんは せか  
我 神 爾 降 誕 世 界



いにち えの ひかりを てらせ り、これによ  
智 慧 光 照 此 由



りてほしに つとむ るものは ほしにおしえ  
星 勤 者 星 教



られて、なんぢぎのひをおが み、  
爾 義 日 拜


  
 なんぢう えよりのひがしをさとれり。  
 爾 上 東 覚  
 しゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
 主 光 榮 爾 歸

【 降誕祭のコンダック 】


  
 こうえいはちちとことせいしんにきす、い  
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今  
 まもいつもよよにアミン。  
 何 時 世 世  
 いまどうていぢよはえいざいのしゅをうみ、  
 今 童 貞 女 永 在 主 生  
 ちのせがたきものにほらをけんず、  
 地 載 難 者 洞 獻  
 てんのつかいはぼくしゃとともにほめうたい、  
 天 使 牧 者 偕 讚 歌  
 はかせはほしにしたがいてたびす、けだ  
 博 士 星 従 旅 蓋  
 しわれらのためにえいきゅうのかみはみど  
 我 等 爲 永 久 神 嬰  
 りごとしてうまれたまえり。  
 見 生 給 え り

【 聖三の歌に代えて 】

代禱) しゅ けいけん もの すく およ われら き たま  
 主よ、敬虔なる者を救い、及び我等に聆き給え、

しゅよ、けいけんなるものをすくい、およびわれ  
 主 敬 虔 者 救 及 我  
 らにききたまえ。  
 等 聆 給

代禱) <sup>よよ</sup> 世世に、

ア ミ ン。

ハリストスに おいて せんをうけ しものハリスト スを  
 於 洗 受 者  
 きたり、アリル イヤ、ハリストスに おい  
 衣 於  
 て せんをうけ しものハリスト スをきたり、  
 洗 受 者 衣  
 アリル イヤ、ハリストスに おいて せんをう  
 於 洗 受  
 け しものハリスト スをきたり、アリル  
 者 衣  
 イヤ、こうえいはちちとことせいしんにき  
 光 榮 父 子 聖 神 歸  
 す、いまもいつもよよに、アミン。ハリスト  
 今 何時 世世  
 スをきたり、アリル イヤ。ハリストスに お  
 衣 於



いて せんを うけ し もの ハリスト スをき た  
洗 受 者 衣  
り 、 ア リ ル イ ヤ 。

【 提綱 (プロキメン) 】

代禱) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>しじょうしゃ</sup> プロキメン、<sup>ねが</sup> 至上者よ、<sup>ぜんち</sup> 願わくは<sup>なんち</sup> 全地は <sup>こうはい</sup> 爾に<sup>なんち</sup> 叩<sup>うた</sup> 拝し、<sup>なんち</sup> 爾を<sup>な</sup> 歌<sup>うた</sup> い、<sup>なんち</sup> 爾の名に<sup>うた</sup> 歌わん、

しじょうしゃよ、ねがわくはぜんちはなんちにこうは  
至上者 願 全地 爾 叩 拜  
いし、なんちをうたい、なんちの名に  
爾 歌 爾 名  
うた わん。  
歌

誦經) <sup>ぜんち</sup> 全地よ、<sup>かみ</sup> 神に<sup>よろこ</sup> 歎<sup>よ</sup> びて<sup>そのな</sup> 呼<sup>こうえい</sup> び、<sup>うた</sup> 其名の<sup>こうえい</sup> 光<sup>さんび</sup> 榮<sup>かれ</sup> を<sup>き</sup> 歌<sup>き</sup> い、<sup>き</sup> 光<sup>き</sup> 榮<sup>き</sup> と<sup>き</sup> 讚<sup>き</sup> 美<sup>き</sup> とを<sup>き</sup> 彼<sup>き</sup> に<sup>き</sup> 歸<sup>き</sup> せよ、

しじょうしゃよ、ねがわくはぜんちはなんちにこうは  
至上者 願 全地 爾 叩 拜  
いし、なんちをうたい、なんちの名に  
爾 歌 爾 名  
うた わん。  
歌

誦經) <sup>しじょうしゃ</sup> 至上者よ、<sup>ねが</sup> 願わくは<sup>ぜんち</sup> 全地は <sup>なんち</sup> 爾に<sup>こうはい</sup> 叩<sup>うた</sup> 拝し、

なんちをうたい、なんちの名にうた わん。  
爾 歌 爾 名 歌

【 使徒經 (アポストロス) 209 端 ガラティヤ書 4 章 4~7 節 】

代禱) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがガラティヤ人に達する書の讀、

代禱) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、期満つるに至りて、神は其子を遣し、彼は女より生れ、律法下の者とな

れり、律法下の者を贖い、我等をして子たるを得しめん爲なり。且爾等子たるに由りて、

神は爾等の心に其子の神、「アツヴァ」父を呼ぶ者を遣わせり。故に爾既に僕なら

ず、乃子なり、若し子ならば、イイススハリストスに由りて神の嗣なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を女から生れさせ、律法の下に生れさせて、おつかわしになった。それは、律法の下にある者をあがない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。このように、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。したがって、あなたがたはもはや僕ではなく、子である。子である以上、また神による相続人である。

\*\*\*\*\*

代禱) 睿智、

誦經) アリルイヤ、

【 アリルイヤ 】

Musical notation for the first line of the hymn: アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

Musical notation for the second line of the hymn: ア リ ル イ ヤ 。

誦經) 諸天は神の光榮を傳え、穹蒼は其手の作爲を誦ぐ、

Musical notation for the first line of the hymn: アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

Musical notation for the second line of the hymn: ア リ ル イ ヤ 。

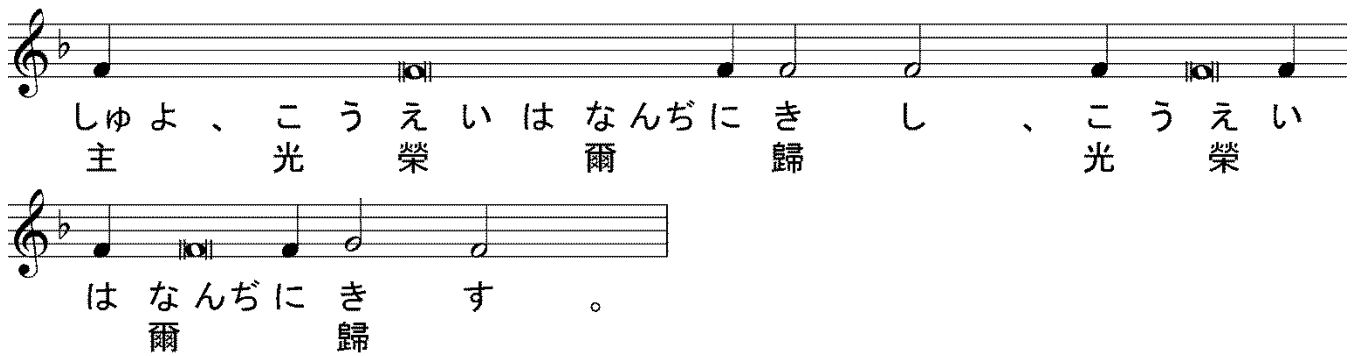
誦經) 日は日に 言を宣べ、夜は夜に智を施す、



【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書3 端 2 章1~12 節 】

代禱) 睿智、

誦經) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



代禱) 謹みて聽くべし、

誦經) イイススはイロド王の時イウデヤのヴィフレムに生れしに、視よ、博士數人 東よりイエ

ルサリムに來りて曰く、生れたるイウデヤ人の王は何處に在るか、蓋我等其星を東に

見たれば、彼を拜せん爲に來れり。イロド王之を聞きて心騒げり、イエルサリム擧りて

亦然り。乃凡の司祭長と民間の學士とを集めて、彼等に問えり、ハリストスは何處

に生るべきか。彼等曰えり、イウデヤのヴィフレムに於てす、蓋預言者に因りて斯く録さ

れたり、云く、イウダの地ヴィフレムよ、爾はイウダの諸郡の中に於て聊も小し

とせず、蓋爾より我が民イスライリを牧せんとする君は出でんと。是に於てイロド密に

博士を召し、詳に星の現れし時を問ひ、彼等をヴィフレムに遣して曰えり、往きて、

細に嬰兒の事を尋ね、之に遇わば、我に告げよ、我も往きて彼を拜せん爲なり。彼等

王に聞きて往けり、視よ、嘗て東に見たる星は彼等に先だちて行き、遂に嬰兒の在る所

に至りて、其上に止れり。彼等星を見て喜に勝えざりき。乃家に入りて、嬰兒の

そのは <sup>とも</sup> <sup>あ</sup> <sup>み</sup> <sup>ふふく</sup> <sup>かれ</sup> <sup>はい</sup> <sup>そのたから</sup> <sup>ばこ</sup> <sup>ひら</sup> <sup>これ</sup> <sup>れいもつ</sup> <sup>けん</sup>  
其母マリヤと偕に在るを見、俯伏して彼を拜し其寶盒を啓きて、之に禮物を獻じた

<sup>すなわち</sup> <sup>おうごん</sup> <sup>にゆうこう</sup> <sup>もつやく</sup> <sup>すで</sup> <sup>ゆめ</sup> <sup>うち</sup> <sup>かえ</sup> <sup>べ</sup> <sup>つげ</sup>  
り、即黄金、乳香、沒藥なり。既にして夢の中に、イロドに返る可からずとの黙示

<sup>え</sup> <sup>た</sup> <sup>みち</sup> <sup>そのほんち</sup> <sup>かえ</sup>  
を得て、他の途より其本地に歸れり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) イエスがヘロデ王の代に、ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき、見よ、東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った、「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」。ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた。エルサレムの人々もみな、同様であった。そこで王は祭司長たちと民の律法学者たちとを全部集めて、キリストはどこに生れるのかと、彼らに聞いた。彼らは王に言った、「それはユダヤのベツレヘムです。預言者がこうしてしています、『ユダの地、ベツレヘムよ、おまえはユダの君たちの中で、決して最も小さいものではない。おまえの中からひとりの君が出て、わが民イスラエルの牧者となるであろう』」。そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、星の現れた時について詳しく聞き、彼らをベツレヘムにつかわして言った、「行って、その幼な子のことを詳しく調べ、見つかったらわたしに知らせてくれ。わたしも拝みに行くから」。彼らは王の言うことを聞いて出かけると、見よ、彼らが東方で見た星が、彼らより先に進んで、幼な子のいる所まで行き、その上にとどまった。彼らはその星を見て、非常な喜びにあふれた。そして、家にはいって、母マリヤのそばにいる幼な子に会い、ひれ伏して拝み、また、宝の箱をあけて、黄金・乳香・沒藥などの贈り物をささげた。そして、夢でヘロデのところに帰るなどのみ告げを受けたので、他の道をとおって自分の国へ帰って行った。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸 す。

※代式祈祷③ へ